

米国の金利引き上げについて

2015年12月17日

米国では12月15、16日にFOMC(米連邦公開市場委員会)が開かれ、政策金利であるFF金利(フェデラル・ファンド金利)誘導目標が0.25%引き上げられ、0.25~0.50%となりました。

米国の利上げは2006年6月以来となります。FF金利誘導目標はリーマンショック後の景気急悪化を受けて2008年12月に0~0.25%に引き下げられていましたが、7年ぶりに実質的なゼロ金利政策が解除されました。

《利上げに至った経緯について》

米国景気は、2008年9月のリーマンショックに端を発する金融システム不安などにより急激に悪化し、失業率は一時10%を超えるなど、戦後最悪と言われる不況に陥りました。これに対応して、FF金利誘導目標が実質ゼロ%に引き下げられるとともに、3次にわたる量的緩和が実施されるなど、金融政策は過去に例がないほど緩和され景気刺激が図られてきました。これらの対応によって、米国景気は徐々に回復し、直近の失業率は5.0%とリーマンショック前の2008年4月以来の水準まで低下しました。こうした環境の好転により、極端に緩和された金融政策を正常化する第一歩として、今回の利上げ決定に至ったと見られます。

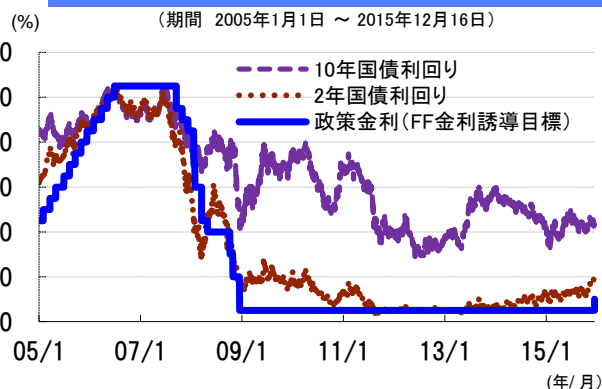
《今後の見通しについて》

イエレンFRB(米連邦準備制度理事会)議長などが、年内の利上げ開始を繰り返し示唆していたため、予想通りと言え、概ね金融市場には織り込まれていました。市場参加者はむしろ2回目以降の利上げのペースについての手ごかりに注目していましたが、FOMCメンバーが考える適切な利上げペースは、2016年中の利上げは4回と前回同様のペースが維持され、より緩やかなペースを見込んでいた市場参加者からは、ややタカ派的なものを受け止められました。一方で、量的緩和により買入れた国債等の残高を相当な期間維持すると表明したこと、イエレン議長が「インフレ率については目標を大きく下回っている」としてインフレ率が上昇してこない場合には利上げを休止するとコメントしたことは、ハト派的なものと解釈されています。

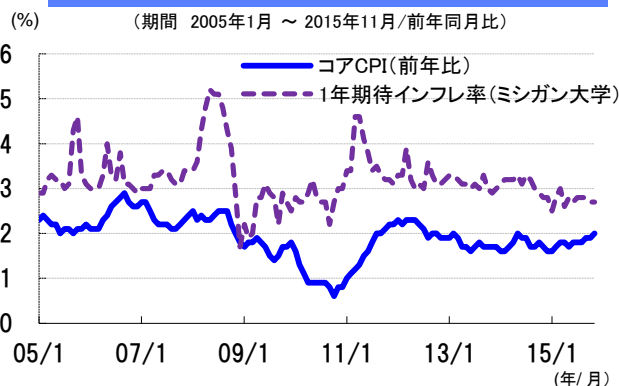
FOMC直後の市場の反応は、利上げ開始時期に対する不透明感が払しょくされたこと、米景気に対する楽観的な見方が広がったことから、株高、金利高、ドル高となり、総じて利上げを好感してリスク資産に資金が流入する展開となりました。

今後の米国の利上げペースは、インフレ率がFOMCでの想定通りに上昇してくるかどうか大きく依存すると思われます。このところ、原油価格が一段の下値を模索する展開となっていることから、インフレ率がさほど上昇せず2016年の利上げペースが年4回に達しない可能性も高く、その場合はドルの上値は限定的なものになると考えます。米国金利やドルの上昇ペースが緩やかとなれば、懸念されている新興国市場、ハイ・イールド債(投機的格付の高利回り債)市場にとっては一息つける状況が予想され、金融市場の緊張は和らぐものと考えられます。今後も、原油価格や米国のインフレ関連指標などから目を離せない展開が続くものの、大きなイベントを無事に通過し、比較的市場参加者がリスクを取りやすい安定的な相場展開が予想されます。

《米国政策金利と国債利回りの推移》



《米国消費者物価指数(CPI)と期待インフレ率の推移》



《米ドルレート(対円)の推移》



出所：Bloombergより明治安田アセットマネジメント作成

●当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類(目論見書等)ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。●当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。●当資料の内容は作成日における当社の判断であり、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。●投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。